
シャボン玉

三式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャボン玉

【著者名】

ZZマーク

N4085F

【作者名】

三式

【あらすじ】

結婚を間近に控えた惣子と、元恋人で幼なじみの茂が雪の降る夜に再会する。幼なじみ恋愛失敗談。

「……………ぐだせー」

泣きながら、彼女は泣き声で呟つた。

シャボン玉

Presented by 三咲

白い。

惣子は歩みを止めて立ち、空を見上げた。

綿を思わせる柔らかな雪たちが、灰色の雲から降つてくる。雪は1時間ほど前から振り出してきた。既に道路や歩道をパレットのよう

に染め上げて いる。

惣子が佇んでいるのは市内にある小さな公園であった。惣子にとつては馴染み深い場所である。昔からここで遊んで、泣いて。そんなことをした場所である。

ブランコ、滑り台、ベンチ。どれを見ても、いつ見ても変わらないその姿で残っていることに、う、と惣子は不意に泣きそうになつた。変わらない そう思つた瞬間に涙腺が緩んでしまつたようだ。だけど、堪えた。鼻の奥がツンとなるが瞬つてこられた。

公園は雪で白く染まつていぐ。土色の地面もそれで埋め尽くされていく。

惣子の頭、肩に積もつていぐ粉雪たち。冷めていく身体。どうせならば、心まで冷たくしてくれればいいのだと惣子は切に願つた。しんしんと鳴つているように積もる雪の音が惣子の耳を通り抜け

てゆく。惣子は、はあと熱い吐息を両手のひらに浴びせてこすり合わせた。

心は凍りつけばいいと思っているのに身体を暖めよつとする自分が情けなくて惨めに感じた。矛盾ばかりだと自嘲する。

惣子は先日成人式を迎えたばかりの「〇」である。

高校を卒業してすぐに就職し、何気ない人生を送つてきた一般的な女性の一人だ。

趣味は読書とピアノで、どちらかといえば内向的な女性である。

惣子はその場できょろきょろと辺りを見回す。

誰かを見つけるかのように。誰かを待っているかのよう。

そり、それが惣子のたつた一つの心残りだった。

藤間 茂はある企業の敏腕サラリーマンだ。彼も有名高校を卒業して進学せずに就職した。仕事を始めて今年で4年目になる。彼は何事にも冷静に、そして真剣に取り組む姿勢から会社では有望株として一目置かれている存在である。人当たりのよい性格のため、上司からも気に入られている。

そんな彼はこの日は残業をし、夜9時を過ぎてからの帰宅となつた。友人の社員たちは既に仕事を済ませて帰つている。確か飲みにいくとかはしゃいでいた筈だ。

しかし今から行くのもなんだと思い、ここは素直に変えることにした。

歩き、電車に乗り、最寄の駅で降りる。いつも通りの帰り道だった。たかが30分で着く短い道のりだ。

ふと、空を見上げる。薄暗い雲が夜空を覆つ。そんなところから降るのは白い冷たい結晶だ。

「雪だ……寒いな」

口に出すとより一層そう感じられる。

早いところ家へと帰つて暖まりたいという欲求が彼を支配する。

近道をして帰るつか。

ふと、そんな考えが浮かんでくる。寒いし、早く帰れるし、そつ

ちのほうがいいと結論付ける。街灯が少なく、暗い夜道になつてしまつのは仕方がないと割り切つた。

進路を変えて歩き出す。

さくさくと一歩踏み出すたびに足元からはそんな音が聞こえてくる。

汚れが真っ白な細雪を染めていく。汚れ。

自分が穢してしまつたあの人はどうなつたのだろうと藤間は想像した。

元気だらうか、何をしてるんだろうか。足が自然とあの公園へと向かう。

いつも待ち合わせた場所、いつまでも語り合つてていた場所。不意に寂しくなる。ああ、どうじこつなつた。どうして捨ててしまつた。

涙が出そつになるのを必死で堪える。涙は流さないと、あの日に誓つたから。

代わりに求めの懇願を言語で表す。声が震えて、情けない響きになつたが、それは切れそうな寒空にすつと吸い込まれていつた。

「やつ、い……」

願つたその行為は結果は、幻想か。または泡沫の夢か。ふと何気なく横切るつもりだつたそこには、かつての自分の半身とも呼べる人がいた。

「どうま、くん」

彼女もこちらに気付いたようで、自分の呼びかけに反応した。

震える声で。

その原因は、寒からだらうか。それとも。

彼女の声を聞いた瞬間、藤間はズキ、と心を痛めた。

藤間くん？

聞きなれない呼称。どうしてそんな風に呼ぶのだろう。だつてほら、以前は。

「どうしたんだ惣子。こんなところで。寒くないのか？」

「……うん」

藤間と惣子は互いに近寄ることはできない。双方と付かず離れずの距離で立ち尽くすだけだ。

まるでそれが自然の距離だといわんばかりに。他人とも、恋人とも似つかないその距離で。心だけが離れてしまったかのようだ。

「……」
「……」

静寂が場を支配する。聞こえるのは細雪が奏でる清閑な音と一人の息遣いのハーモニーだけだ。

藤間は何もせず、何も語ろうとせずそこにいた。それは惣子が何かを言おうとする仕草が見えたからだ。

それは藤間独自のカンと、長年惣子と共に暮らしていた経験からである。

寒くなつて藤間は掌に息を吹きかけた。じわりとそこに広がる暖かさを感じながら、藤間は惣子を見つめた。

懐かしい。

頭の中には過去に惣子と過ごしてきた情景が蘇っている。海にも行つた。映画にも行つた。カラオケにだつて、ゲームセンターにも行つた。

ただそれでも、一番残っているのはこの場所のことである。
一番最初に出会った場所。最も多くの時間を共有した場所。

「ねえシゲちゃん」

「ん? 何、惣子。腹でも痛いの?」

「違うよ、お腹なんて痛くないよ」

おどけた様に幼い惣子は笑う。つられて幼い藤間も笑う。
土で汚れた服がやけに一人には映える。温かな夕日が一人を照らし
ている。辺りには誰も居ない。

惣子と藤間は同時にどきりとした。理由もなく高鳴る胸に戸惑いを
隠せない。

「ね、シゲちゃん。」

「…なに?」

惣子が藤間の瞳をじっと見つめる。藤間も見つめ返す。

ほつぺに泥がつこてるよ、惣子。

一瞬だけそう思った藤間だが、それは言えなかつた。真剣な瞳
がそれをさせなかつた。

雰囲気が暖かい。目は真剣なくせに穏やかな表情を浮かべあう一人
の間には壁なんて存在してなかつた。そう、このときは。
瞳と瞳が交差する。それは愛の告白にも似た儀式だつた。

「シゲちゃん。これからも一緒にいてくれるよね」

「…当たり前だよ。大人になつたら、結婚しよう」

「う、うんっ。約束っ。」

「うん、約束」

本当に嬉しそうに照れる惣子を見て藤間は微笑む。それは何かを決意した後の達成感にも似た微笑だ。

自然な流れで家に帰ろうかと足が外に向かう。歩き出す瞬間に藤間が頬の土を掃つてやると、惣子は真っ赤に顔を染めた。

「結婚、かあ…。ねえシゲちゃん。私、綺麗なお嫁さんになれるかな？」

「惣子は可愛いから大丈夫だよ。僕がほしょつする」

「本当？真っ白いウエディングドレス着ても笑われないかな？」

「笑われないよ。もし笑われたら僕がやつつけてやるぞ」

手を繋ぎながら、誇るよつて、手のひらに向かって藤間は口に出す。その顔つきに惣子は一層の胸の高鳴りを感じた。

惣子のそれは家に着いてからも落ち着くことはなかった。自室に居るときも、風呂に入っているときも、繋いだ手の暖かさが惣子を支配し続けていた。

転機があつたのは惣子が高校1年のときだ。藤間と2歳年の離れている惣子は中学時代、自分の進路のことで悩んでいた。
惣子の学力は高くはなかつた。県内のトップクラスの進学校には進めないにしても、ある程度のところならば狙えるといったレベルである。

比べて藤間は惣子からは雲のような場所に居る人であつた。走ること以外、特に球技に関しては下のランクにいる彼だが、学力は高かつた。それは何事にも懸命に取り組む姿勢の賜物だった。陸上部で走りこみ、勉学に力を入れるその姿に教師たちはみな感心したもの

だ。おかげで藤間は公立校でトップの学校に進学することが出来ていた。

中学1年から、幼い頃の約束を守るように藤間と惣子は交際を始めた。藤間は陸上部で活動していたため、さかんに遊びに行くことはできなかつたが、それでも月に2度の休みには惣子と「デート」をしたものだつた。部活で疲れているだろうに、と心配する惣子だつたが、それでも自分のために行動してくれる彼に甘えていたものだつた。家同士も近場だつたため、特に負担はかからなかつたのである。

そうして、それから1年の付き合いを通して惣子は進学した。本当ならば藤間と同じ学校に進みたかったのだが、惣子は落ちてしまつた。

そのために惣子は藤間の学校と逆にある私立の学校に入学したのである。

私立高校に入学して惣子はバスケット部のマネージャーとなつた。友人と一緒に選んだ部活である。学生の活気に中てられて惣子は自分が活発になつたと自覚するようになつた。今まででは自宅で大人しくしているだけだったのだが、人並みに友人と買い物に出かけるようになつた。そして藤間との付き合いは保つていたが、昔よりは薄れていた。

藤間は相変わらず陸上部で活動していた。陸上の強豪校として有名なそこは藤間にとつて居心地が良かつた。元々筋は良いのである。ライバルと呼べる仲間も出来て、藤間はより一層部活に取り組むようになつた。疲れ果てて、惣子のことを後回しにしてしまうこともあつたのだが、それでもこの時間は手放せないものであつた。

そして、藤間と惣子は自然消滅という形となつていつた。駅内などで見かけても、お互い一言だけの会話をする程度の仲になつてしまつた。惣子が高校2年のときである。

藤間は就職して、仕事をすることになった。やがて一人は会つては少なくなった。

「…………」

惣子が開きかけた口を閉じる。あ……と蚊が鳴くような声は出たが、その先を口に出すことは出来なかつた。

「……そりゃ、や」

「……？」

代わりに藤間が声を出す。顔は惣子を向いてはいなかつたが、惣子は別に気にしなかつた。

「俺たちが一番最初にあつた場所もこゝだよな
「……つん」

藤間は少し歩いて近くのブランコに手を触れさせる。
急激に掌が冷やされたが、そこに残る思い出が暖めてくれるような気がしていだ。

わらわらと歩く。

「んで、惣子が泣きながら俺に泣きじてきただつたよ」

「……ん」

恐らく現在藤間が立つている場所がそのときの場所なのである。中途半端な位置で歩みを止めてしま、郷愁に田を細めた。

「本当はさ俺が言おうと思つてたの。テストの後にしおつかと悩んだんだけど、惣子が3日前に言こ出すからなあ」

「…うん」

「おかげで舞い上がりちゃって、そのときのテストは散々だったよ」

「……」「めぐ」

藤間は惣子に近づいていく。そして彼女と3人はありつかといつた場所でまたも止まる。

「……そして、最後に一人で来たのもここだった」

「…うん」

「あの頃は部活に夢中だったから、惣子と一緒にこうつて気持ちが足らなくなっていたよ」

「それ、は」

「いやいいよ。俺が全面的に悪かつたのさ。惣子が留守電を入れても滅多に返さなかつたのも俺だし」

「うん……」

藤間は全てを悟つたかのように微笑を浮かべた。身体や心は妙に落ち着いていて、今なら全てを許せるような気がした。

「……それで、惣子はこんなとこりで何をしていたの？」

優しく、限りなく優しく藤間は語りかけた。それは幼い頃から変わらない響き。

惣子は胸が熱くなつた。まるで昔の恋心が再沸騰したかのよう。変わらない。ずっと好きだつた。この、藤間だけの優しい響きが好きだつた。

泣きそうになる。堪えて、惣子は言葉を紡いだ。

最後の。

「藤間くん…私、来月結婚するの」

「…………」

「相手は藤間くんの知らない人。会社の先輩なの」

「…………うん」

「藤間くんよりカッコいいの。きっとお給料も高いの。好きだつて。愛していろつて何度も告白されたの」

「うん」

「交際もしたの。まだキスとかもしてないけど、色々なところに行つたの」

「うん」

「だから、だから…」

落ち着いてる藤間に對して、惣子はぼろぼろと大粒の涙を流す。瞳は赤くなり、無意識に唇を噛んでしまう。

「あの人より、先に…………して…ください」

「…」

切れた。藤間の中で何かがぶつりと切れた。崩れ落ちそうになる惣子の腕を思い切り引っ張り、胸に抱きこむ。

藤間の広い胸板に顔を埋め、惣子は背中に腕を回す。

「…好き、だつたの。愛してたんだよ、シゲちゃん…」

「ああ…」

「でもシゲちゃん、そんな素振り、見せなかつた…つ。だから、だからあつ」

「…………」

「…………」

何も聞きたくないと言わんばかりに藤間は惣子に口づけした。舌を差し出し、絡める。一瞬のことで惣子は何をされているか分からなくなつた。ただ舌を縮こませるだけだ。

構わないというように藤間は情熱的だつた。歯茎を舐め、唇を吸つた。惣子が何の動きを見せなくとも構わなかつた。

本当は、愛していた。

心の底から好きだつたのだ。冷たくしてしまつたこともあつたが、それは惣子を傷つけたくなかったから。それと、安心感からだ。惣子が自分以外を好きになるはずがないという自惚れだつた。愛していた。いや、今でも愛している。関係はなくなつてしまつているが、愛しているのだ。

傷つけたくない、惣子なら大丈夫だと驕つていた自分が悪いのだ。そんな自分に、彼女にやめてくれと言つ資格はない。本当はこんな口づけをする資格すら存在しないのに。

「……っ」

ちょうど一分後、藤間は惣子から唇を離した。先ほどより泣き出してしまつた惣子を見る。

可愛い惣子。美しい惣子。いつも俺の後ろにいた惣子。俺だけのものだつた惣子。

もう、見るのはないだろ。

俯く惣子の顔を軽く上げてやる。鼻を啜りながら自分を見つめる姿に藤間は自分も泣きそうになつた。奥歯を割れるほどに歯んで、堪える。

「幸せにしてくれる男と結婚するって信じてる。だから、もう少しよ
ならだね」

「……っ、シゲ」

「もう会つことは無いだろうから、言つておくれよ」

「…まつて…」

「誰よりも愛していたんだ。惣子が僕を想つよりもずっと」

惣子が何かを言おうと口を開く。ただ、それよりも早く藤間は言
う。

さよなら

何の制止もされてないのに惣子は喋りだすとすら出来なかつた。
ただ涙を流す惣子の姿を背中に藤間はいつの間にか立ち去つていた。
人目も憚らずに大声をあげる惣子。夜の雪の中に、彼らの涙は溶け
ていった。

シャボン玉のような恋。

水と溶液が混ざり合つて一つになつて。
空に溶けていくように、はじけてきた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4085f/>

シャボン玉

2010年12月4日15時52分発行